

第38回神戸女学院大学英語英文学会(KCSES)大会報告

英文学科長 立石 浩一

英文学科卒業生・大学院生・大学院修了生の研究発展および在学生の向学意欲の推進を目的として設立された神戸女学院大学英文学会(KCELS)は、2010年度の第35回大会より名称を神戸女学院大学英語英文学会(KCSES)と改称して4年目となりました。本年度も、KCSESは例年通り11月の最終金曜日、29日に午後2時からL-28教室で開催されました。特別講演とOG・院修了生の研究発表という2部構成で、今回はグローバル・スタディーズコースが学会準備を担当しました。

特別講演は、元駐カンボジア大使、元駐ベルギー大使の内藤 昌平氏をお招きし、「日本外交の決定力ー1997年夏 カンボディア内紛の後始末ー」という標題にてご講演いただきました。カンボジア時代の外交官としてのご経験に基づき、外交という仕事の意味・機能について内容の濃いお話をいただきました。質問も大変活発にあり、非常に興味深いご講演でした。内藤先生には、大変貴重なご講演をいただき、心より感謝申し上げます。

研究発表では、本学大学院通訳翻訳コース 修了生で、国立大学法人総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻研究生の徳嶺 絢子氏より「翻訳プロジェクトに関する一考察ー芸術学論文を翻訳するにあたって」、そして本学英文学科卒業生で、本学大学院文学研究科英文学専攻博士後期課程在学の高 雅妃氏より「日本語・韓国語代名詞における心的距離研究」についてご発表いただきました。

来年度、2014年度は言語コミュニケーションコースが学会準備を担当し第39回大会を開催予定です。今回の大会にご尽力下さったグローバル・スタディーズコースの先生方、ご参加くださった皆様、及び日頃KCSESをご支援いただいている会員の皆様に厚く御礼申し上げます。



特別講演

日本外交の決定力

ー 1997年夏 カンボディア内紛の後始末 ー

元駐ベルギー大使 内藤昌平

「外交とは国際関係を交渉によって処理することであり、また国際関係が大使や外交使節によって調整され処理される方法をさすこともある。」と辞書にある。交渉に当たっては暴力を使わないことが、外交の外交たる所以だが、言葉の説得力に加えて、外交官が代表する国家の軍事的・経済的・倫理的な力、あるいは他国との連合による力が効果を発揮する。

私が大使を務めたカンボディアでは、内戦後の国家再建への貢献が日本外交の課題で、それを効果的に調整・処理するのが歴代大使の任務だった。私の場合は、カンボディア政府内での権力闘争が武力衝突に至り、その勝者として実権を握った人物から民主主義政治の約束を取り付けるという特別の役割が降りかかった。その交渉には、当時の日本の力が反映された。



私が着任した1996年は、その3年前の国連管理下の制憲選挙の結果を受けて、内戦の敵同士であった二政党が連立して政権を担う極めて不安定な政情だった。首相を第一と第二の二人とし、その下に官房長官、内務大臣、国防大臣をそれぞれ二人ずつ抱える二頭政治。しかし経済の再建には外国の援助に頼らざるを得ず、その四分の一を占める日本の経済

協力の現場責任者である日本大使には政府をあげて好意的だった。日本は、内戦を終了させた和平協定の成立に尽力したことに加え、国連の明石康氏が制憲選挙実施の最高責任者として活躍されたこともあり、国際的にも重みを持っていた。日本の国内では、カンボディア国民を助けようという純真な気持ちで満ちていて、民間協力も至る所で実施されていた。日本政府の資金と技術協力で、道路や橋、港、火力発電所、上水道、病院、学校等が次々と完成するとその都度、ラナリット第一首相あるいはフンセン第二首相に並んで、日本大使が祝辞を述べる。私は、生活環境を改善することでカンボディアの人々が国内平和を守る決意を新たにすることに貢献したいとアピールしていた。

日本の経済協力は、被援助国の経済的自立を促すことを目的としている。大使は担当大臣の役所が日本の援助を生かせるように機能しているか確認しなければならない。しかし外国の政府に命令することは出来ないで、一種の利益誘導の手法で、望ましい方向に動くのであれば援助が出るし、反対の方向であれば差し止めるといった仕組みで臨む。経済分野では、おのずと相手国の内政に入り込むことになる。外交に経済的な力が発揮される好例。

一方政治分野での内政関与は、極めてデリケート。大使の行動が「内政干渉」と批判されると、「ペルソナ・ノン・グラータ」として任を解かれてしまう。カンボディアの再建は民主化とセットで進めることが国際社会の支援の前提となっていたので、内政の民主化を見届けることも大使の任務。その重要なステップとして、1998年に総選挙が予定されていた。皮肉にもそこでの決着を優位に運ぼうと、二人の首相の対立が抜き差しならなくなって、1997年7月5日に両首相の手勢の間で双方が戦車を繰り出す程の銃撃戦が首都プノンペンで勃発した。その結果、ラナリット第一首相が海外に亡命し、フンセン第二首相が実権を握ることになった。国際社会は、フンセン首相が企んだクー・デタではないのかと疑った。フンセン首相は疑いを晴らすべく、武力衝突はラナリット首相側が仕掛けたのでやむなく防衛したままで、民主主義に則った政治を続けると宣言した。しかしそれが行動で裏付けられるためには、空位となった第一首相の後任を決めることに始まって、翌年の総選挙に至るプロセスが民主主義的に運営されなければならない。事変後私がカンボディアを去るまでの一か月余の期間は、フンセン首相の行動が国際社会の容認する「民主化」の埒を越えないようにチェックする日々となった。一方フンセン首相は、クメール・ルージュ政権を追い落とした後も8年間内戦を戦い抜いて来た「つわもの」で、ライバルのいなくなった権力者として思うように政権を動かしたい気分になっても不

思議ではない。しかし国際社会から非民主的と断じられて援助が止まれば、財政は破綻し復興が頓挫してしまう。米国は早くも援助を止め、ASEANはカンボディアの加盟を先延ばしにした。民主主義という価値観を共有する暗黙の連合が、私に力を貸してくれた。私はフンセン首相に国際社会の見方を率直に申し入れ、時には二人の間が険悪になることもあった。結局は日本の善意が理解され、フンセン首相の言葉と行動による民主主義への具体的コミットメントを引き出すことが出来て、国際社会の支援体制は続けられることになった。

それ以来カンボディアでは、今年7月の総選挙が4回目となっている。その公正さについてはいろいろ批判もあるが、民主化は少しずつ改善されて進まざるを得ないのが現実。私は、1997年8月の離任の後12年後と15年後にカンボディアを訪れたが、その都度現地の人々の顔が穏やかになっているのを見るにつけても、カンボディア復興のため日本が力を発揮できたことは、日本外交の誇るべき成果だと確信している。

発表要旨

翻訳プロジェクトに関する一考察— 芸術学論文の翻訳

徳嶺 絢子

国立大学法人総合研究大学院大学 文化科学研究科 国際日本研究専攻 研究生
(神戸女学院大学大学院文学研究科英文学専攻博士前期課程 通訳・
翻訳コース修了)

神戸女学院大学大学院通訳・翻訳コース「翻訳プロジェクト」では、実際に翻訳をし、その訳文に単語帳や考察部分を付け修士論文とするが、私の場合は、アメリカの学術雑誌「*Winterthur Portfolio*」に掲載された2本の英語論文(①「Fitting Rooms: The Dress Designs of Frank Lloyd Wright」(「試着室—フランク・ロイド・ライトによるドレス・デザイン」)②「Georgia O'Keeffe's Radiator Building: Gender, Sexuality, Modernism, and Urban Imagery」(「ジョージア・オキーフ《ラディエーター・ビル》—ジェンダー、セクシュアリティ、モダニズム、都市の表現」)を翻訳した。

その過程で、近代のアメリカにおいて、いかに女性たちが表象する側、表象される側として、主体性や意図をもって美術に関わっていたかを知ることができた。今後は日本美術史、特に近世の女性画家の研究を進めながら、芸術とジェンダーに関する幅広い文献の翻訳に引き続き取り組んでいきたい。

発表要旨

日本語・韓国語代名詞における心的距離研究

高雅妃

神戸女学院大学大学院文学研究科英文学専攻博士後期課程

本研究では日本語話者と韓国語話者が会話内において内と外をどのように使い分けているかを韓国語代名詞우리(uri)を用いて証明した。また、さらに代名詞「私たち」「私たちの」を使用する時の日本語話者と韓国語話者の心的距離の違いを議論した。

韓国語の代名詞우리(uri)は、韓国語の辞書では主格の「私たち」と所有格の「私たちの」と定義されているが、韓国語話者は日本語話者が会話内で「私たち」「私たちの」を用いない場面でも、極めて頻繁にuriを会話内で用いる傾向がある。また、辞書に「私たち」という複数形で定義されているのにも関わらず、韓国語話者の会話内において一人称の所有格「私の」で用いられることもある。

本研究では、韓国語代名詞우리(uri)は所有格で用いられる時は発話者と韓国語代名詞우리(uri)が修飾する人物や名前との心的距離の近さを表していると考えた。そして韓国語代名詞우리(uri)が主格として用いられる時は、発話者と聞き手との心的距離の近さを表し、特に発話者が聞き手に対して心的距離が近いということを示す。よって、韓国語代名詞우리(uri)は韓国語話者同士の会話において代名詞だけの役割だけでなく、心的距離も表していると考えた。

国際学会発表

*別府 恵子氏

ポーランド、ニコラス・コペルニクス大学で開催の国際ヘンリー・ジェイムズ学会(2013年4月26-28日)にて研究発表。

“Henry James Comes to Terms with the Civil War and the South: A Round of His Visits to the South in 1904-1905”

*Marcelo FUKUSHIMA氏

フランス、Ecole Normale Supérieure de Lyon と Université Lumière - Lyon 2で開催されたNew Developments on Ricardo - The Ricardo Society(2013年9月10-12日)にて研究発表。

“Edward West’s Law of Diminishing Returns reconsidered: Its Application to the Theory of Corn Trade”

*東森 勲氏

韓国、韓国外国語大学で開催されたKorean Association of Translation Studies International Conference(2013年10月18-19日)にて研究発表。

“Some Pragmatic Issues on Japanese Comic Translation into English: A Relevance-Theoretic Account”

*小杉 世氏

セントルシアで開催されたThe 16th Triennial ACLALS Conference (2013年8月5-9日)にて研究発表。

“Reading Japanese Nuclear Literature in Pacific Context”

*田辺 希久子氏

アントワープ(ベルギー)Katholieke Universiteit Leuven、およびUniversity of Utrechtで開催された Low Countries Conference II: Transferring Translation Studies(2013年11月28-30日)にてパネル参加。

“Transferring Translation Studies(HTS)”

*立石 浩一氏

スイスで開催されたThe 19th International Congress of Linguists (7月21-27日、University of Geneva)にてポスター発表。

“The Accentuation of the So-Called I-Ochi (/i/-Drop) Predicates in Japanese”

*Yolanda TSUDA氏

モントリオール(カナダ)で開催されたInternational Leadership Association 15th Annual Global Conference (2013年11月2日)にて研究発表。

“Leadership and Education for Women”

ジュネーヴ(スイス)で開催されたGeneral Council Meeting, International Organization for Migration(2013年11月27日)にて発表。

“Women and Migration: Voice of a Migrant in Japan”



***Goran VAAGE氏**

ノルウェー、Bergen大学で開催された NAJAKS 2013 - The 25th Anniversary Conference of the Nordic Association of Japanese and Korean Studies (2013年8月21-23日)にて研究発表。

“Kansai Style Conversation and its Role in Contemporary Japan”

京都大学で開催された「第一回ヨーロッパ日本研究会EAJS日本会議」(2013年9月28-29日)にて研究発表。

“A Comparison of Japanese and English Humour Structure from a Sociolinguistic Perspective”

***吉田 純子氏**

オランダ、Maastricht 大学で開催された International Research Society for Children's Literature 21th Biannual Congress (2013年8月10-14日)にて研究発表。

“Are Miyazaki Hayao's Animations on the Waves of Media Globalism?”

会員による出版紹介

◇保坂 華子氏

“Teaching Effect of Contrasting Intonation Systems.” *US-China Foreign Language* (Vol.12 Number 3 March 2014)David Publishing Company.

◇David McCULLOUGH氏

Spring Wind: The Story of the Japanese Martial Arts (単著 Kitayama Books, 2013年6月)

◇田辺 希久子氏

『スタンフォード大学の超人気講座 実力を100% 発揮する方法』(シャザド・チャミン著 単訳 ダイヤモンド社 2013年8月刊)

『翻訳研究のキーワード』(ペーカー／サルダーニャ著 共訳 研究社 2013年9月刊)

◇和氣 節子氏

Coleridge, Romanticism and the Orient: Cultural Negotiations. (Eds. David Vallins, Kaz Oishi, Seamus Perry 共著 Bloomsbury 2013年刊)

『イギリス理想主義の展開と河合栄治郎』(行安茂 編、共著 世界思想社 2014年1月刊)

◇吉田 純子氏

『子どもの世紀—表現された子どもと家族像』(共著 ミネルヴァ書房 2013年7月刊)

英文学科卒業論文・プロジェクトコンテスト

2008年から卒業論文および卒業プロジェクトのコンテストを開催することとなり、今年度も担当教員からの推薦による応募を受けつけた。全体では13名の応募があり、2月に英米文学、英語学、グローバル・スタディーズ、通訳・翻訳の各部門で選考が行われた。最優秀賞受賞者、優秀賞受賞者は次の通り。なお、最優秀者の論文は、『優秀卒業論文・プロジェクト集』(2014年度春刊行予定)に掲載する。

英米文学 (応募者数 4名)

<最優秀賞>

該当者なし

<優秀賞>

E10049 加藤 慶子

E10087 中川 侑香

E10153 谷 絢美

英語学 (応募者数 3名)

<最優秀賞>

E09021 長谷川 睦

<優秀賞>

E10096 西川 美咲

E10098 新田 裕美

グローバル・スタディーズ (応募者数 5名)

<最優秀賞>

E10038 岩本 芳野

E10043 垣原 愛実

<優秀賞>

E10037 石崎 沙織

通訳・翻訳(応募者数 1名)

<最優秀賞>

該当者なし

<優秀賞>

E10002 秋山恵里奈

記念賞

2013年度、以下の学生に対して、次の学内の記念賞が授与されました。

佐々城さく(女32C36)記念賞 E11135 津村 真衣

デフォレスト記念賞 E11027 日下貴実花

神戸女学院大学英語英文学会 会則

(1995年 4月 1日施行)
(2005年 9月 22日改訂)
(2010年 3月 2日改訂)

- (1) 名称
本学会を神戸女学院大学英語英文学会と称する。
- (2) 目的
本学会は本学英文学科卒業生および大学院英文学専攻修士の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。
- (3) 構成
本学英文学科卒業生、大学院英文学専攻修士有志および本学英文学科教員、元英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。
- (4) 活動
年一回、英語英文学会大会を開催する。
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英語英文学会その他の活動の内容を報告する。
その他。
- (5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。
(b) 運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

内規

I. 大会での発表について

- (1) 発表希望者は毎年7月1日までに、発表論文の簡単なレジュメと略歴を添えて、英文学科事務室まで申し込み、KCSES運営委員会で審査の上、決定する。

II. 維持費・参加費について

- (1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。
- (2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入する。
- (3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費などの経費の支出は、学科の会計委員が担当する。
- (4) (3)に関しては、KCSES専用の口座を利用する。



編集後記

よりグローバル化した社会の実態を反映させるべく、KCSESとして新たなスタートをきって、無事3年が過ぎました。今後とも何卒変わらぬご支援の程よろしくお願い申し上げます。

会員国際活動報告・出版物のご連絡、ありがとうございました。会員の皆様のご協力に感謝申し上げますと共に、今後の益々の研究の発展をお祈りいたします。

*KCSES Newsletter*編集委員

(2013年度運営委員)

○Shawn BANASICK ○立石浩一 ○和氣節子 (ABC順)

KCSES Newsletter No. 29

編集発行 神戸女学院大学英語英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532

<http://www.kobe-c.ac.jp/english/gakkai/gakkai.html>

2014年3月発行